

大豆「里のほほえみ」の良質安定栽培の実証

要約

堆肥無施用で収量の低下が懸念される大豆ほ場において、発酵鶏糞の施用によって、子実重では供試区が対照区を上回る結果となり、収量を確保することができた。

○ 展示のねらい

大豆は、有機物施用により窒素肥沃度を高めたほ場へ作付けすることが基本であるが、堆肥が施用されていないほ場が多く、近年、大豆の低収傾向が続いているため、堆肥無施用ほ場での大豆「里のほほえみ」の収量が向上する栽培法（発酵鶏糞の施用）を実証する。

区	基肥施用量 (6/19施用)	化学肥料由来の窒素量	発酵鶏糞施用量 (6/19施用)	追肥 (8/10施用)	総窒素量
供試区	オール14 (14-14-14) 20kg/10a	2.8kg/10a	JAはが野発酵鶏糞(NET-15kg) (2.1-5.3-5.9 -石灰20.4) 150kg/10a	尿素(N:46%) 10kg/10a (N:4.6kg/10a)	10.55kg/10a
対照区	オール14 (14-14-14) 20kg/10a	2.8kg/10a	—	尿素(N:46%) 10kg/10a (N:4.6kg/10a)	7.4kg/10a

○ 主な成果

調査区	成熟期	主茎長(cm)	主茎節数	分枝数(本/株)	莢数(個/株)	倒伏程度
供試区	10月25日	84.2	12.9	2.6	60.6	1~2
対照区	10月25日	81.2	12.1	2.8	60.4	1~2

調査区	子実重(kg/10a)	百粒重(g)	大粒比率(%)
供試区	343.2	39.3	96.7
対照区	326.6	39.2	97.1

※収量調査は、生育中庸な条2m×4カ所の調査による。

成熟期は、両区とも10月25日となった。主茎長は供試区が長く、主茎節数も供試区が多くなった。分枝数、莢数、倒伏程度では両区に差はなかった。

子実重では供試区が対照区に比べて重くなった。百粒重、大粒比率は両区に差は見られなかった。生育期間から収穫期にかけて適度の降雨もあり順調に生育したことから、両区とも収量は良好な結果であった。

○ 今後の方向性

生育期間中の天候が良好であったことから、両区とも百粒重や大粒比率は高くなったが、子実重では供試区が対照区を上回る結果となっており、今後は、堆肥無施用で収量低下が懸念されるほ場を中心に、鶏糞の施用による収量の安定向上技術の普及を図る。

実施機関：芳賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：真岡市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315